

# 1975年の井上ひさし

—自作の小説を音楽劇に脚色したとき—

坂本 麻実子

INOUE Hisashi in 1975

—The Time He Adapted his Novels for Music Dramas—

SAKAMOTO Mamiko

E-mail: msakamot@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード: 井上ひさし, それからのブンと FUN, たいこどんどん, ブンと FUN, 江戸の夕立ち  
keywords: INOUE Hisashi, *Sorekara no Bun to Fun*, *Taiko Dondon*, *Bun to Fun*, *Edo no Yūdachi*

## 1. 自作の小説を音楽劇に脚色した井上ひさし

放送作家から出発し、戯曲と小説の2つのジャンルで執筆を続けた井上ひさし(1934-2010)は、1975年(当時41歳)に自作の小説2編を立て続けに音楽劇に脚色して初演を行った。『それからのブンと FUN』(1975年1月テアトル・エコー公演。原作『ブンと FUN』)と『たいこどんどん』(1975年9月五月舎公演。原作『江戸の夕立ち』)である。井上の舞台作品(1969年2月初演『日本人のへそ』から2009年10月初演『組曲虐殺』まで)を見ると、自作の小説を脚色した音楽劇は『それからのブンと FUN』と『たいこどんどん』の2作だけなので、1975年は井上の作家人生の中でも特別な年だったと言える。

しかし、井上は自作の小説を脚色した3作目の音楽劇を考えていたらしい。NHK総合テレビ『ラストメッセージ 井上ひさし“最期の作品”』という番組(2013年5月4日放送)によれば、井上は死の直前に8つのタイトルを書き出したメモを残していた。順番に、樹の上の軍隊、合牢者、ヒロシマの朝鮮王、日光の皇太子、ヴェルディとボーイト、新宿夜間喜劇学校、岸田國士伝、天皇機関説、である。第一に挙げた「樹の上の軍隊」については、井上没後に蓬萊竜太(1934-)が戯曲『木の上の軍隊』を完成させて(蓬萊2013)2013年4月に初演が行われたが、筆者の目下の関心は第二に挙げた「合牢者」にある。井上には1974年1月に『オール讀物』に発表し、翌1975年3月に刊行された『合

牢者』(井上1975a)という短編小説がある。『合牢者』は『それからのブンと FUN』の初演と『たいこどんどん』の初演の間に刊行されており、当時の井上なら『合牢者』を音楽劇に脚色しようと考えてもおかしくはなかった。実際、井上は音楽劇『合牢者』への意欲を30年以上過ぎてても捨てていなかった。それはなぜか。小説を音楽劇に脚色し、初演した1975年の仕事に何か思い残しがあったからではないだろうか。そこで1975年に至る井上の創作状況を跡づけ、さらに『それからのブンと FUN』および『たいこどんどん』とそれぞれの原作を音楽面から検証する作業を通して井上の作家人生における1975年の意味を考察し、彼の音楽劇への一つの見方を提示したい。

## 2. 1975年までの道程

まず『それからのブンと FUN』の原作である小説『ブンと FUN』はNHKラジオ1969年1月2日放送のミュージカル台本として執筆され、翌1970年1月にノベライズされて刊行された(井上1970)。井上は1972年9月刊行の『ブンと FUN』新装版に付けた「あとがき」の中で、『ブンと FUN』は初めての小説であり「いらざる張切り方」をして書いたと告白している(井上1972a)。その後、1974年11月に『ブンと FUN』を脚色した戯曲『それからのブンと FUN』が『新劇』1974年11月号に発表され(のち1976年11月刊行の戯曲集『雨』に収録された)、翌1975年1月にテアトル・エコーにより初演され

た。次に『たいこどんどん』の原作である小説『江戸の夕立ち』は1972年8月に『別冊文藝春秋』に発表され、同年10月刊行の作品集『手鎖心中』(井上1972b)に収録された。1975年8月には『江戸の夕立ち』を脚色した戯曲『たいこどんどん』(井上1975b)が刊行され、同年9月に五月舎により初演された。

以上、1969年から1975年までの6年の間に井上は仕事の間を放送から戯曲と小説に移し、戯曲と小説を平行して書き進めるようになった。そのような時期に井上はなぜ自作の小説を音楽劇に脚色したのか。表1の年表から考えてみよう。

放送作家時代の井上は『ひょっこりひょうたん島』(NHK 総合テレビ1964年4月～1969年3月放送)

表1. 『それからのブンとファン』と『たいこどんどん』関連年表

『それからのブンとファン』	『たいこどんどん』	補足事項
1969.1 NHK ラジオミュージカル『ブンとファン』放送(台本執筆)		1969.2 『日本人のへそ』初演 1969.3 NHKテレビ『ひょっこりひょうたん島』放送終了(1964.4～)
1970.1 原作の小説『ブンとファン』刊行(朝日ソノラマ)		1970.11 『ムーミン』の主題歌で第12回日本レコード大賞童謡賞 1971.4 『十一ぴきのネコ』初演(1971.9 第6回齊田喬戯曲賞) 1971.9 『道元の冒険』初演(1972.1 第17回岸田戯曲賞)(1972.3 第22回芸術選奨文部大臣新人賞) 1972.3 『手鎖心中』発表(別冊文藝春秋)(1972.7 第67回直木賞)
1972.9 『ブンとファン』新装版刊行 ※「あとがき」つき	1972.8 原作の小説『江戸の夕立ち』発表(別冊文藝春秋) 1972.10 『江戸の夕立ち』(『手鎖心中』に収録)刊行(新潮社)	1974.1 『合牢者』発表(オール讀物)
1974.11 戯曲『それからのブンとファン』発表(新劇)		1975.3 短編集『合牢者』刊行(文藝春秋)
1975.1 『それからのブンとファン』初演(テアトル・エコー)	1975.8 戯曲『たいこどんどん』刊行(新潮社) 1975.9 『たいこどんどん』初演(五月舎)	2010.4 井上ひさし死去により『合牢者』の音楽劇への脚色は実現しなかった。

に代表されるように主として子ども番組の台本を書いていた。歌が好きな井上は『ひょっこりひょうたん島』の台本に多くの歌を挿入し、歌詞も自分で書いた。1969年1月2日にはNHK ラジオが「新春こども劇場 グランドマンガミュージカル」と銘打って『ブンと FUN』を放送した。ミュージカル『ブンと FUN』の台本は未見であるが、主要な歌は小説『ブンと FUN』に挿入したと見られる<sup>(1)</sup>。同じく1969年2月、井上は『日本人のへそ』で演劇界にデビューした。『日本人のへそ』にも多くの歌を挿入した井上は、以後も音楽劇を書き続けて演劇界での地位を固めていく<sup>(2)</sup>。歌を活用する井上の仕事はまず放送音楽界で評価され、アニメ番組『ムーミン』の主題歌（ねえ！ムーミン。井上ひさし作詞、宇野誠一郎作曲）は1970年11月に日本レコード大賞童謡賞を受賞した。演劇界でも1971年4月初演の『十一ぴきのネコ』は児童劇を対象とする齊田喬戯曲賞を受賞し、1971年9月初演の『道元の冒険』は劇作家の登竜門である岸田戯曲賞（現岸田國土戯曲賞）と芸術選奨文部大臣新人賞を受賞した。しかし、小説では勝手が違った。井上は次のように回想している。

「もともと歌が大好きですから、初期の戯曲から、作中にいつも歌を入れていました。この癖が昂じて、しまいには小説まで歌をばらまいて、編集者や読者を面食らわせていたものです。」（扇田 [編] 2011: 186）

井上は初の小説『ブンと FUN』でも作中にコミカルな歌をばらまいた。「グランドマンガミュージカル」を原作とするからなのか、出版元の朝日ソノラマは『ブンと FUN』を文芸小説ではなく少年向けの読み物として1970年1月に刊行した。井上が小説家として文壇に認知されるのは1972年7月の直木賞受賞作『手鎖心中』まで待たねばならなかった。ただし、歌をばらまいた『ブンと FUN』に対して『手鎖心中』は歌を封印した小説であった。井上は歌をあきらめられなかったらしく、受賞後第1作で1972年8月に『別冊文藝春秋』に発表した『江戸の夕立ち』では幫間（太鼓もち）を主人公にして歌を挿入した。翌9月に『ブンと FUN』新装版を刊行するときも、歌をばらまいた小説を書き改めることはしなかった。それにもかかわらず『ブンと FUN』も『江戸の夕立ち』も結局は音楽劇に脚色された。井上が自作の小説を音楽劇に脚色したのは、肉

声を発する放送や演劇とは異なり、活字を読む小説では歌の魅力を十分に発揮できないというのが一つの大きな理由ではないか。次に『ブンと FUN』と『それからのブンと FUN』、『江戸の夕立ち』と『たいこどんどん』、それぞれの挿入歌を比較対照し、小説から音楽劇への脚色を音楽面から検討する。なお、『それからのブンと FUN』は2013年10月のホリプロ&こまつ座公演、『たいこどんどん』は2011年5月の井上ひさし追悼公演も参考にした。

### 3. 『ブンと FUN』と『それからのブンと FUN』の挿入歌の対応関係

『ブンと FUN』（全9章）は売れない作家 FUN 先生が書いた小説の主人公、大泥棒 FUN が現実世界に飛び出し、奇想天外な盗みを重ねて大騒動をおこす物語である。『ブンと FUN』に後日談を加えて音楽劇に脚色したのが『それからのブンと FUN』である（全17場。うち第13場から第17場が後日談の部分。FUN はクサキ・サンスケ警察長官と悪魔の企みにより仲間から永久に追われる身となり、FUN 先生は地下牢に幽閉される）。表2に『ブンと FUN』と『それからのブンと FUN』の挿入歌の対応関係を示す。

表2を見ると『ブンと FUN』は原作がミュージカルだけに10曲もの歌が挿入されており、主役（FUN、FUN 先生）、敵役（悪魔、クサキ・サンスケ警察長官）はもちろん、彼ら以外の役にも歌が割り当てられている。そして『ブンと FUN』の挿入歌のうち7曲が『それからのブンと FUN』に採用された（FUN と FUN のテーマ、犯人さがしの推理力を養うための論理ソング＝常識ソング、FUN チャッチャ、サイザンス、悪魔ソング、ただ好きなのさ、盗みましようよ）。『ブンと FUN』のストーリーの枝葉部分に挿入された歌はカットされたが（おお便器よ、スキヤット、ひとつひろって母のため）、『それからのブンと FUN』のために新たに作られた歌も2曲ある。まず敵役で裏の主役とも言える悪魔の登場用に「悪魔呼び出しの呪文」を加えた。次に FUN 先生の身代わりに捕まった FUN を裁く場面（FUN 裁判）では、『ブンと FUN』に会話体で記述された弁論に旋律をつけ、裁判長、弁護人、傍聴人の役者たちがオペラ風の発声と振り付けで演じる。後日談の部分には新曲を作らずに、第4場でサンスケが独唱した「常識ソング」のデュエット・バージョンを挿入した。

表2. 小説『ブンと FUN』と音楽劇『それからのブンと FUN』の挿入歌の対応関係

章	『ブンと FUN』(全9章) [ ] 内は演唱者	場	『それからのブンと FUN』(全17場) [ ] 内は演唱者
I	(1) ブンのテーマ [FUN先生]	一	(1) ブンのテーマ [FUN先生、ブン]
II	(2) おお便器よ [大力幸之介]		なし
III	(3) 犯人さがしの推理力を養うための論理 ソング(雨の降る日は 天気がわるい) [クサキサンスケ警察長官]	四	(2) 常識ソング(独唱バージョン) [クサキ・ サンスケ警察長官] ※歌詞は「論理ソング」と同じ
III	(4) ブンチャッチャ [踊り子たち]	六	(3) ブンチャッチャ [スクールメイツ風の 女の子たち]
III	(5) スキャット [踊り子たち]		なし
IV	(6) サイザンス [ご婦人がた]	七	(4) サイザンス [上品上品したご婦人3人]
	なし	八	(5) 悪魔呼び出しの呪文 [呼び屋]
IV	(7) 悪魔ソング [悪魔]	八	(6) 悪魔ソング [悪魔]
V	(8) ひとつひろって母のため [伊井艶太郎]		なし
VI	(9) ただ好きなのさ [FUN先生、ブン]	八	(7) ただ好きなのさ [FUN先生、ブン]
	なし	十	(8) ブン裁判(劇中オペラ) [裁判長, 検事, 弁護士, 傍聴人たち] ※『ブンと FUN』に記述された会話に旋律 をつけて歌う。
IX	(10) 盗みましょうよ [世界の人々]	十四	(9) 盗みましょうよ [世界の人々]
	なし	十六	(10) 常識ソング(デュエット・バージョン) [クサキ・サンスケ警察長官、悪魔]

備考: 井上(1970, 1984)より作成。( )内の数字は通し番号。

モノを盗むのに飽きて権威や常識を盗むようになったブンは、世界を混乱させた(ある意味、変革を促した)張本人であり、『ブンと FUN』では世界の人々が「盗みましょうよ」を歌ってフィナーレとなる。一方、『それからのブンと FUN』ではサンスケが悪魔と結託してブンに永劫の罰を与え、サンスケと悪魔は「常識ソング」をデュエットで歌って世界は「秩序」を取り戻したことを宣言する。

『それからのブンと FUN』では主役ペアであるブン(変装の名人だが大半は地味な和服に束ね髪の美女として登場)と万年貧乏の FUN先生、敵役ペアである悪魔(黒タイツでピンク色のシッポをもつキュートな女の子として登場)と成り上がりのサンスケという対照的な2組に割り当てられた歌にも注目したい。主役ペアはデュエットで歌うが(『それからのブンと FUN』の主題歌である「ブンのテーマ」、愛情を確かめ合うときの「ただ好きなのさ」)、主役らしい独唱で他の役を圧倒することはない。一方、敵役ペアは前述のようにデュエットもするが、主役にはない独唱が用意されている。サンスケは「常識ソング」、悪魔は「悪魔ソング」を独唱し、特に

「悪魔ソング」(魂とりあげりゃ人は人に勝ちたがる)には高度な歌唱力が求められ<sup>(3)</sup>、歌の魅力によって敵役ペアは主役ペアに勝るとも劣らない存在感を獲得している。音楽劇としての『それからのブンと FUN』は主役以上に敵役の歌の出来ばえに成否がかかっているとと言える。

なお『それからのブンと FUN』の挿入歌には井上が後年の音楽劇でリメイクして使用した歌が2曲ある。「ただ好きなのさ」は『夢の泪』(2003年10月新国立劇場初演)の挿入歌「いま、ぼくは感じる」として、「悪魔ソング」は『円生と志ん生』(2005年2月こまつ座初演)の挿入歌「桃太郎気分ネ・・・」となった。『それからのブンと FUN』は歌の魅力を存分に発揮するように脚色された作品だからこそ井上は歌詞を作り直して再利用したのだろう。

#### 4. 『江戸の夕立ち』と『たいこどんどん』の挿入歌の対応関係

『江戸の夕立ち』(全4段)は江戸の薬種問屋鱒屋の若旦那清之助と吉原の幫間の桃八が品川遊郭で

の揉めごとから釜石まで船で運ばれ、東北各地を放浪した末に9年ぶりに帰郷したところ、鯛屋はつぶれ江戸も東京に変わっていたという一種の道行ものである。主役がペアという点では『江戸の夕立ち』は『ブンとファン』と同様であるが、『江戸の夕立ち』は前作『手鎖心中』で歌を封印したことを引きずっているのか挿入歌は5曲にとどまり、『ブンとファン』の挿入歌が10曲もあるのに比べると随分と控え目である。その『江戸の夕立ち』を音楽劇『たいこどんどん』(全22場)として生まれ変わらせるために、井上はオープニングの歌「江戸は情婦<sup>いろ</sup>」とフィナー

レの歌「東京は大中心」を配して庶民にとって江戸から明治への転換とは何であったかを聴覚的に印象づけたのをはじめ<sup>(4)</sup>、挿入歌を増やした。表3に『江戸の夕立ち』と『たいこどんどん』の挿入歌の対応関係を示す<sup>(5)</sup>。

表3を見ると『江戸の夕立ち』挿入歌5曲は、品川遊郭に繰り出した清之助と桃八が歌う座興歌(好きなお方の来るときは)、釜石鉱山で働く隠れキリシタンの女たちの歌(あるま・まーてる・どろろさ)、桃八の戯れ歌2曲(天の星さん数えてみれば、庭の飛び石すなすなすな)、柏崎の港の若衆が歌う

表3. 小説『江戸の夕立ち』と音楽劇『たいこどんどん』の挿入歌の対応関係

『江戸の夕立ち』 (夕立ち, 夕吹雪, 夕焼け, 夕立ちの全4段) [ ] 内は演唱者		『たいこどんどん』(全22場) [ ] 内は演唱者	
段		場	
	なし	一	(1) 江戸は情婦 [江戸の住人たち]
夕立ち	(1) 好きなお方の来るときは [桃八, 清之助]	二	(2) 好きなお方の来るときは [桃八, 清之助]
	なし	二	(3) 涙ぼろぼろお芋はぼくぼく [袖ヶ浦他, 品川の女郎たち]
	なし	四	(4) 今度ッ陸さ上がったら [千石船の船子たち]
	なし	五	(5) あたしゃ左目おまえは右目 [清之助, 桃八, 釜石の芸者たち]
	なし	六	(6) 一人語り「烏賊づくし」 [桃八]
	なし	七	(7) そこはどこの細道じゃ [おとき, 清之助]
夕焼け	(2) あるま・まーてる・どろろさ [てれーじょ他, 隠れキリシタンの女たち]		なし
	なし	一〇	(8) 鮎は瀬に住む [釜石鉱山の地大工たち]
夕焼け	(3) 天の星さん数えてみたら [桃八]		なし
夕焼け	(4) 庭の飛び石, すなすなすな [桃八]		なし
	なし	一一	(9) 富本節「お菊幸助」(咲く花の散るとはかねて知りながら) [桃八の弾き歌い]
	なし	一二	(9) 富本節「お菊幸助」続き(玉の糸, 繋ぐ夫婦の延命酒) [桃八の弾き歌い]
	なし	一三	(10) 馬こ追い唄 [遠野の馬子と馬商人たち]
	なし	一四	(11) だから道草は真っ平さ [清之助, 桃八]
	なし	一八	(12) 鳥追い唄 [清之助, 桃八, 米沢の子どもたち]
	なし	一九	(13) 富本節「連理の橋」(色かへぬ常磐の里に住みなれて) [桃八, 三味線は清之助]
夕立ち	(5) 佐渡おけさ [柏崎の若衆たち]	二一	(14) 佐渡おけさ [柏崎のだれか]
	なし	二二	(15) 東京は大中心 [東京の住人たち]

備考：井上(2010, 1984)より作成。( )内の数字は通し番号。

民謡（佐渡おけさ）である。脚色に際して、井上は遊び好きの若旦那と幫間の道行にふさわしいように座興歌と民謡の活用を考えたようで、『たいこどんどん』の座興歌は『江戸の夕立ち』にある「好きなお方の来るときは」に加えて新たに追加し（涙ぼろぼろお芋はぼくぼく、あたしゃ左目おまえは右目、そこはどこの細道じゃ、だから道草は真っ平さ）、民謡は『江戸の夕立ち』にある「佐渡おけさ」に加えて新たに追加した（今度ッ陸さ上がったら、鮎は瀬に住む、馬こ追い唄、鳥追い唄）。さらに『たいこどんどん』には桃八の持ち芸である語りものを取り入れた。『江戸の夕立ち』で秋の釜石では食膳がイカ一色になったという記述があるのを活かし、『たいこどんどん』では桃八に「烏賊づくし」を語らせた<sup>(6)</sup>。これは語りものと言っても「いか」を含む言葉を面白おかしく列挙する余興であるが、本格的な語りものとして富本節を取り入れ、桃八と清之助は富本節を語って路銀を作りながら東北を放浪する設定にした。富本節は豊後系浄瑠璃の一派で、語りものとしては常磐津節と清元節の中間的格をもつ<sup>(7)</sup>。実際、富本節は寛延元年（1748）に常磐津節から独立し、安永・天明年間（1772-89）には常磐津節より人気となるが、文化11年（1814）になると富本節から別れた清元節に人気を奪われた。『たいこどんどん』が設定された江戸最末期の安政6年（1859）から慶応4年（1868）には富本節はすでに衰退期にはいっていたが、井上は東北では人気があったとする。『江戸の夕立ち』では桃八が語った富本節として「朝比奈地獄廻り」、「鳴神」、「三勝縁切」、「阿波の鳴門」、「千本桜」、「静忠信道行」、「新夕霧始」の7つの演目を挙げるにとどまる。一方、『たいこどんどん』では「お菊幸助」は桃八の弾き語り、「連理の橋」は桃八の語り、清之助の三味線ではほんの一部ではあるが実演する。「お菊幸助」も「連理の橋」も現在は清元節に移されて伝承されている演目である。

## 5. 小説と戯曲の間に橋を架ける仕事

井上にとって戯曲と小説は作家活動の両輪であった。戯曲も小説も書く作家は珍しくないが、井上が他の作家と異なるのは小説にも戯曲と同様に歌を挿入した点である。

しかし、ミュージカル台本をノベライズして作中

に歌をばらまき、「児童讀物とも、テレビの台本とも、ひっくり返したオモチャ箱ともつかぬ騒々しい作物」（『ブンとファン』新装版「あとがき」より）となった『ブンとファン』でデビューした井上は、小説家としては中途半端な扱いを受けた。井上は小説の編集者や読者を当惑させないように歌を封印して『手鎖心中』を書いたが、これが1972年7月に直木賞受賞作となった。すると、井上は受賞後第1作となる『江戸の夕立ち』では憂さ晴らしのように歌を挿入し、9月には『ブンとファン』を再出版した。それでも満足できなかったらしく、井上は1974年11月に『ブンとファン』を音楽劇『それからのブンとファン』に、翌1975年8月に『江戸の夕立ち』を音楽劇『たいこどんどん』に脚色し、この2作を1975年の1月と9月に相次いで初演した。井上は『ブンとファン』を『それからのブンとファン』として初演し、『江戸の夕立ち』を『たいこどんどん』として初演することで、作品として最終的な決着をつけたのだろうと筆者は考える。自作の小説を原作とする音楽劇は2作にとどることから、1975年の井上にとって自作の小説を音楽劇に脚色することは作家としての非常手段だったかもしれないが、自作の小説と戯曲の間に橋を架けた初めての仕事であった。

1975年以後の井上は、小説は小説として、戯曲は戯曲として書き進めた。1980年代にはいると、小説では1981年8月刊行の『吉里吉里人』で日本SF大賞と読売文学賞を受賞し、1983年には直木賞の選考委員に選ばれ、戯曲でも1984年4月に自作を専門に上演する劇団こまつ座を旗揚げして独自の音楽劇を追求し<sup>(8)</sup>、小説と戯曲の両分野で作家としての地位を築いた。その実、井上は自作の小説を音楽劇に脚色する仕事に未練を残しており、しかも音楽劇に脚色したかった小説とは『それからのブンとファン』、『江戸の夕立ち』を初演したのと同じ1975年に公刊した小説『合牢者』であった。

『合牢者』は『江戸の夕立ち』に続くかのように明治初年に時代設定されており、旧幕時代は貧乏御家人だった矢飼純之助が明治維新後に警視庁巡査となり、同業者だが殺人容疑で捕まった原田源太郎に口を割らせるため囷となって入牢する物語である。もし『合牢者』が音楽劇に脚色されていたら、井上の最後の新作でプロレタリア小説家小林多喜二（1903-1933）を主人公とする音楽劇『組曲虐殺』（2009年10月こまつ座初演）のように取調室での尋

問や獄中の孤独が歌われたかもしれない。しかし、筆者が注目するのは『合牢者』は歌を封印した小説という点である。1975年に初演した『それからのブンとファン』と『たいこどんどん』の原作は歌を挿入した小説であり、歌を封印した小説については井上は音楽劇への脚色をやり残していた。歌を頼まない小説を歌の力で作り変えて音楽劇として成立させることができるなら、小説家井上ひさしの作品群は劇作家井上ひさしにとっては音楽劇の原材料の山である。井上の中で小説と戯曲の間に橋を架ける仕事は1975年の時点では非常手段であったが、2010年の時点では新たな創造の可能性を予感させるものに変化していたのだろう。だからこそ、死を目前にした井上は『合牢者』を音楽劇に脚色して初演することで1975年の仕事を完結させたいと願ったのではないか。

#### 注.

- (1) NHK ラジオ放送のミュージカル『ブンとファン』挿入歌のうち、ブンとファンのテーマ、悪魔ソング、ただ好きなのさ、盗みましようよ、以上4曲はCDで聞くことができる(宇野2004)。この4曲は小説『ブンとファン』に挿入されている。
- (2) 扇田昭彦は井上の戯曲のうち音楽劇(扇田は多寡にかかわらず歌が入っている作品とする)は70パーセントを占めると指摘している(扇田2012:130)。
- (3) 参考までに、宇野誠一郎は「悪魔ソング」は「残酷なことを歌いながら、歌い手はその内容に無関心という雰囲気を出して欲しい」と思ったので、天地総子(『それからのブンとファン』初演時に悪魔を演じた)に「基本的にビブラートを付けないこと、決して声を強く出さないこと、リズムを機械的にとること」と注文をつけ、天地は普段とは違う声色で歌ったと述べている(宇野2004)。
- (4) 「江戸は情婦」と「東京は大中心」は歌詞は異なるが旋律は共通である。これは桃八の幕切れのせりふ「江戸はなくなっても江戸者はどこまで行っても江戸者」、「江戸が東京になろうが、東京が化物になろうが、どうにも変りようはない」に対応した作り方である。
- (5) 『たいこどんどん』挿入歌のうち、涙ぼろぼろお芋はぼくぼく、東京は大中心、以上2曲はCDで聞くことができる(宇野2009)。
- (6) 桃八の「烏賊づくし」のような即興での一人語

- りは、すでに『藪原検校』(1973年7月5月舎初演)で座頭杉の市が語った「早物語」の例がある。
- (7) 桃八のせりふにも「富本の三味線は、常磐津と清元との、中間の弾き方をしていただかないとねえ。硬くもなくやわらかくもなくという弾き方を・・・」(第14場)、「常磐津のような鯨鉾ばった弾き方でも駄目、かといって柔らかすぎると清元になってしまう」(同前)とある。
- (8) こまつ座の音楽劇については坂本2009を参照。

#### 参考文献.

- 井上ひさし(1970)『ブンとファン』東京:朝日ソノラマ
- 井上ひさし(1972a)『ブンとファン』(新装版。「あとがき」を付す)東京:朝日ソノラマ
- 井上ひさし(1972b)『江戸の夕立ち』井上ひさし作品集『手鎖心中』収録、東京:文藝春秋
- 井上ひさし(1975a)『合牢者』東京:文藝春秋
- 井上ひさし(1975b)『たいこどんどん』(新潮書き下ろし劇場シリーズ)東京:新潮社
- 井上ひさし(1976)『それからのブンとファン』戯曲集『雨』収録、東京:新潮社
- 井上ひさし(1984)『井上ひさし全芝居 その二』(『それからのブンとファン』、『たいこどんどん』を収録)東京:新潮社
- 井上ひさし(2010)『江戸の夕立ち』『手鎖心中』(文春文庫、1975の新装版)収録、東京:文藝春秋
- 宇野誠一郎(2004)『宇野誠一郎作品集Ⅱ』(CD) CDSOL-1099、東京:ウルトラ・ヴァイヴ
- 宇野誠一郎(2009)『こまつ座の音楽』(CD) KICS-1495、東京:キングレコード
- 坂本麻実子(2009)「井上ひさしと6人の役者による音楽劇」『富山大学人間発達科学部紀要』第4巻第1号、11月、135-140頁
- 扇田昭彦[編](2011)『井上ひさし』東京:白水社
- 扇田昭彦(2012)「音楽劇としての井上戯曲」(初出は2003)『井上ひさしの劇世界』収録、129-139頁、東京:国書刊行会
- 蓬莱竜太(2013)『木の上の軍隊』(井上ひさし原案)『すばる』第35巻第5号、90-132、135-155頁
- (2013年10月21日受付)
- (2013年12月11日受理)

